

第十一章 災害・変異

天変地異・疫病飢饉は、幾度となく繰り返される戦乱に苦しめられたこの時代の人々に、更に精神的にも物質的にも深刻な打撃を与えた。天体や気象の異変は人力では如何ともなし難いが、水損・旱損・飢饉などには、農業・商工業・交通の発達を遂げたこの時代には、これに対処する方策は、前代よりも充実していたであろう。殊に守護大名・戦国大名等は自己の勢力を拡張する必要上、国内の産業経済の充実に意を用いた程であつたから、不時の災害に遭つ

ても、国力の疲弊を最少限度に止めるだけの対策を構っていたと見なければならぬ。大名等は急の出陣に應ずる軍糧の貯えなども常に怠らなかつた筈であるから、その反面備荒用貯蓄も構っていたものと考えられる。

王朝時代には全国一律に義倉・常平倉その他種々の賑給用の貯米が命ぜられたが、領国単位になつた当代には、國によつて個々の備荒対策がなされていたので全国一様でなく、本県に於ては如何なる方法が構ぜられていたのか、これを知ることが出来ない。

また当代にわが県は如何なる災害・変異を蒙つたか、これを直接に知る資料がないが、後世江戸時代に編集された『讃岐国大日記』と三豊郡観音寺町神惠院観音寺の寺記『弘化録』との両書に簡単な記載があるので、辛うじて災害変異の一斑を窺うことが出来る。弘化録の災害記事は大日記の記事によつたものらしいが、大日記は何によつてこれを記録したのか明瞭でない。或いは中央や諸国の史料によつたとすれば、諸國並みに讃岐の災害もあつたと見たわけである。茲に讃岐国大日記を主にしてその他二三の書から当代の災害変異を見ると次のようである。

天 変 日月星辰に関する変異として、次の如きものが記録されている。

正平十九年 (一三六四) 二月、彗星、客星が現れた。

貞治元年 (一四二二) 十月十二日、太陽が二つ並出した。

寛正三年 (一四六二) 四月八日、太陽が三つ並出した。

同 四年 (一四六三) 正月一日、月が三つ並出した。正月六日、太陽が二つ並出した。

享祿四年 (一五三一) 八月廿七日、彗星が北東の空に現われた。

天正五年 (一五七七) 九月廿九日、大彗星が西南の空に出現し、年を越えても消えなかつた。

災 害 風雨霜雪、水害旱損等の災害は依然として多く、そのための農作被害も多い。然し飢饉を招くことが

比較的少なかつたことは、時代の進歩によるものと云わねばならない。

正平十五年 (一三六〇) 大地震。

延文五年 (一三六六) 六月廿二日、大雪が降り六尺も積つた。極寒冬のようにあつた。

正平十六年 (一三六六) 二月六日、大風。四月、大雪。

貞治五年 (一三六六) 三月七日、大風。

正平廿二年 (一三六七) 九月十日、雹が降り、人が之に当つて死ぬものもあつた。

正平廿四年 (一三六九) 六月八日より八月十五日にかけて雨降らず。牛馬の疫病が流行した。

建徳元年 (一三七〇) 五月十四日より七月二十日にかけて雨なし。

建徳二年 (一三七一) 七月十日、大地震。

文中二年 (一三七三) 六月廿七日、大風。八月十三日、大雨、大風、五穀が損じた。

天授元年 (一三七五) 正月廿五日より三月三日にかけて大雪降る。

天授五年 (一三七九) 三月下旬より八月下旬にかけて雨なし。

弘和元年 (一三八一) 百日も早魃が続いた。

元中三年 (一三八六) 大旱魃で、また大風があつた。

元中七年 (一三九〇) 大旱魃で、また大風があつた。

応永三年(一三九六)七月廿二日より九月二日まで大雪。(大旱の誤りか)
 同 十三年(一四〇六)正月廿七日、大雪、山野の竹木は倒れたり、折れたりした。
 同 十四年(一四〇七)五月十八日より七月十五日にかけて雨なく、大飢饉を招いた。
 同 十五年(一四〇八)正月一日、十三日、地震。四月十六日より八月十一日にかけて雨がなかつた。
 同 十七年(一四一〇)小嵐が人家に満ち、田畑の作物を喰い、被害が莫大であつた。
 同 十八年(一四一一)大嵐の被害去年の如し。
 同 十九年(一四一二)六月、七月、旱魃があつた。
 同 二十年(一四一三)三月七日、雹が降つた。
 同 廿六年(一四一九)秋、大風の被害があつた。
 同 廿七年(一四二〇)大旱魃があつた。
 同 三十年(一四二三)五月九日、大雨、大風があつたが、五穀の被害はなかつた。
 同 卅一年(一四二四)四月十二日、大霰が降つた。
 永享二年(一四三〇)八月十七日、大雨、大風。
 同 五年(一四三三)五月より十月にかけて旱魃、牛馬の疫病が流行した。
 同 六年(一四三四)大旱魃であつた。
 長祿元年(一四五七)諸国とも旱魃で、五穀が熟さなかつた。

同 二年(一四五八)六月廿六日、大雪。十一月十九日、雷電あり、雷鳴天地に響いた。
 同 三年(一四五九)天下大旱魃、五穀が稔らなかつた。
 寛正元年(一四六〇)旱魃。八月晦日、大風が吹き、これによつて稲が実を結ばなかつた。
 文明七年(一四七五)八月七日、大風が吹いた。
 文明十三年(一四八一)大旱魃であつた。
 同 十七年(一四八五)夏に旱魃、秋に大雨、洪水で田が損じた。
 同 十八年(一四八六)旱魃に見舞われた。
 文亀元年(一五〇一)大旱魃で飢饉を招き、人々多数が餓死した。
 同 三年(一五〇三)大旱魃で、特に七月十七、八日には、山野屋裏の竹木は皆炎熱のために割れた。
 天文元年(一五三二)正月二十日より廿七日にかけて大地震。
 同 十一年(一五四二)二月、旱魃あり。
 同 十三年(一五四四)六月二十日、七月八日、八月十九日、大風。
 同 廿三年(一五五四)飢饉で、死者が多かつた。
 永祿二年(一五五九)五月十日より八月十九日にかけて旱魃。
 同 六年(一五六三)四月下旬より八月中旬にかけて大旱魃。
 天正元年(一五七三)八月廿八日、大風。

同 六年（一五七八）四月より九月にかけて雨多過。

同 七年（一五七九）八月一日、洪水があり、阿波では多くの人が流れ死んだ。

同 十年（一五八二）寒川郡秋毛なく、阿波より救けしめた。

同 十二年（一五八四）十一月廿九日、大地震起り、年を越えても止まなかつた。

疫 病 伝染病・流行病などについては、当代を通じて次の五件が記録されている。

弘和元年（一三八一）三月下旬より八月下旬にかけて雨なく、天下に疫病が流行した。

応永十一年（一四〇四）疫病天下に満ちた。

寛正二年（一四六一）天下疫病、骸骨が巷に充ちた。

弘治三年（一五五七）疫病乱満して、人民が多く死亡した。

天文八年（一五三九）春夏ともに疫病大いに流行し、人々多数が死亡した。

これだけしか記録されていないが、件数としてはもつとあつたことであろう。一度び蔓延すると、医療の方法が充分でなかつた当時としては、従前の場合と同様手の施しようがなく、多数の死亡者を出し死骸は巷にあふれ、悲惨を極めたものであつたと想像される。